三美城

白

世之事伎艺熱者樹黨逐派
仕勢護短圓誠門下者噫可
歎哉哉諸歌者添水注ゝ病諸
夫人病熱則譫語掌壓心而
睡必魘或倘溝壑或没波濤
控追鬼捕諸般苦辛一為傍人
所嘲醒諸苦如洗蓋樹黨護短
者無味解魘覺焉耳斯書
也蕉翁之遺言而世芳係筆

永田文庫

記蘭更梓以千世後為祝融
自所集人今茲新剞劂功成焉
其言叮嚀精詣實可彼喚醒
病樊與獻兎者而能洗諸苦也矣

享和改元之春

生々庵瑞馬撰書

徳川宗家文庫

源氏物語集

ゝ
ゝ
ゝ

俳諧を言之言ハ天地開闢の時より生有陰神陽神殿駅庶
務に天下アてまつめかを喜哉遇可羨少女と形
喜哉遇可羨少男と乃ち陽神ハ
ゝ世ふる詞なる而ち言ゝ故ゝ是を言れ始と是ゝ神代ゝ
文字定まり世人の世ゝ為てをさのをなるゝて三十一字と言れる

八雲ゝ立出雲ゝ八重垣つまこめゝ
やゝ紀つゝるそれ八重垣

此言ゝ定れゝ世ゝ和歌風ゝれハ和哥と云和歌ゝ連
歌俳諧俳諧あ連歌ハ白川の法皇の時代ゝ歌の名有

徳川宗家文庫

此号は先人徳号と云白の数もちまつる日本武尊東
夷せんとの下向吾妻の山路波ふて
新らつくをとこて歌を人めるる
とゝ侍しかれは
かなくて越ゆ八九枝日ふ八十日よ
出矢絶しは壹の浜ゆ連歌の起とゝ云つ業平世の
玉かゝの役の時ゆ舟宴歌めり人のいとなとぬかぬえふ一あれ
と云上ゆ又逢坂乃関八越たんその盃は四の一いまつの玉し
て歌は来ぬ歌付とゝ侍
後白河の院時程の法師小林と云連歌差合とゝ侍の

法式の云伝ゆつ先本式あり聯句法立と先ゆ新式あり
俳諧と云八貴門宮家々の云利口之物をなるむきたるゆゆ
ゆきものゆくを付物つぬとの知ゆとせ利口しゆ弁と
韻学大成ゆ鄭綮詩語多俳諧俳ゆ戯と諧八和也唐ゆたハ
和ゆて俳ゆ諧を俳諧と云又滑稽と云有滑稽伝管仲
楚人答ゆ本朝ゆ一休和尚ある先ふ八人ゆ和尚ゆ答乃
弁乃上ゆ知りていゆ利口古今集ゆ入れ歌を俳諧
歌と定む先ゆ新ゆ入て連歌のたてこと鎌世ゆ俳諧の
連歌とゝ
夫俳諧とゝ中ゆ代々利口のゆにたハれ先達俳

よ諧を新に中に雅俗の橋爲自出をなるひく世上に廣
まへるも中分へりめてつまと詞と成くかしと妃名之をなるに
亡師芭蕉翁氏道に出て三十余年俳諧和て実成終り
師の俳諧ハ名おもしれ名ようてむしれ俳諧に非ル諧の俳
諧人さしハ俳諧の名をてもあるに誠をなく代しむかしく
拙ノ移るもへるあるや師も氏道に古人なしと云又故人
の翁をそれハ求るにやもし今おりふ処の流も氏後行をれ
出て色をそれ我をたく来者を恐ると百く詞有むしに
語奇に名ある人多し皆その諧ならもく諧をたるあり我
師ハ誠なれりのに誠を使へ永く世の先達と為る俳不

代へ久しくを立て氏時俳諧に諧をなるの天正に氏人の經
を持るや師をへ為る人を連俳也一之人詞世に連歌有俳諧
を人を連俳に成れも詞を連俳別てむしに成に詞法仕
をなるの世有俳名言と云者に声に云詞新に俳言と連歌
に成る声のものあれも俳言の方に風に帳拍子律の
調に例なぬ切様形と云れと和連歌に成る鬼女就
歌そのか千句のものに詞俳言と連歌に好へ詞の猿本花
梅雲の雪雪雨小夏門出猫人幾女なの詞を言拙句を
結巴の用書小句も数句を人作る拙の歌を俳言と

名よめてをお引るとうとて女郎花

我為あさを人あかつて歟

此句俳正遍昭さう歟の蕉るの時与発る之俳諧のる本
なり詞ゆゑ一かられいさふるを上句も詞ゆゑ一らんの
されさるを下の句と昔る之先師のいとくゆゑ一の俳諧句
雖然あはれとなれるもはめやうみ思ひ入て歟

おりゆてふ人のこゝろのくるるに
立かくれつゝ行るゝもう歟
寄なるはるの隣のちりふと
なう恒ちりうそ花ハ咲ちば
又いとく喜あの称ハ金歟連歌之四ゆ一之高き金く

俳諧之又月雨ゆ俗の浮巣を見よりくとゆて句ハ詞之ふ
ふなり一字巣を見ゆゆんと云而俳之又表身や時のつくく
双而てと云表句ゆゆれ名れあるしゆゆ之ゆ上紙を仏
詞ともに俳ゆ一句を見ゆて一首のてく仕ゆ一ゆ之
俳諧なう詞みゆんゆ有其ゆこの句れ名仏ゆ之首
信而一篇ゆ見て一ゆ仏
詩歌連俳ハゆに風雅之上三の月の八俗を而ゆ名ゆ一俗ゆ
而と俳ハゆ一ゆと云而歟一花ゆ咲ゆ者ゆ俗ゆ養ゆる縁
の先とまて云月もゆ一きこの比を見ゆゆ又水ゆ俗ゆ蛙を
古池ゆ飛込水の音ゆ比ゆ歟一て蛙にあれゆる中ゆ

雅のことゝ書に俳諧を付らるるにきはまりを作家
るや句を成るゝ所ハ多俳諧の誹こ俳諧の式のゆハ連歌の式
より習て先達の説法をうけ連歌より新式を追加りに
二條良基撰改作之今案ハ一条禅閤の作この三ツを一紙と
したるハ宵柏乃作ゝ連ゝ之ゝ数ある抱ハ四ゝ七句云
りのハ句ゝ万俳諧ゆハをやまくゆ法しるゝ
今案の追加ゝ漢和の法き先を大抵俳諧の法とむりまを
立ゝ真法の先合の書そのかゝその出世にあしそのゆ
をゝ人ハ師信用ゝ云りその中に俳を言ゝ
大抵よろしゝと云ゝ先合のゆもあくてハ調ゝ

師の門ゝその一出河ゝとゝハ甚ゝ出ゝ法を垂ゝ
ゝゆハ事記ゝされりとをいゝる名あれそ
ゝ法しゝてハゝ名の詮るし代ゝ河まるゆ作れと
人用ひゝれハ何ゝ名るゝ法を出して私ゝ先を守れとハ
動りゝ示ゝ先合のゆハ明四ゆもるゝ先ハ大りゝに
して宜ゝたくゝ説ゝ説ゝある門先ハ亜ゆ後して信用し
く半ゆるりの密ゝ門の法ゝ抱ゝハ方ゝ
悪のゆを先師云りむりゝ二句結ゝ小ハ簡ゝ
句ハ悪の河を悪句集ゝ亜その河をつゝ亜句ゝ句のの
亜ゝ後を亜ハゝるゝいまゆ亜ハ亜別ゝ大切のゆゝ抱ゝ

もうしんそのかたと宗祖宗祇の句を一句まて出すの例多紀ゆ
ゆゑに式後西門人も読して一句ホてもまたさるものもあるん
うとこそあるべきなれ云ふ句を無句とも仔付かさ紀句ゆ
ゆゑ必ず無の句を付てあ句ゆゑに数にたるべしとこそ是ハ式
句ゆゑホてつくく無ゆも及へうに新式ゆ式沙法あるうしこ
云うしかも無のゆハ分てそ座の宗匠に任せへしとこそ旅のゆ
ある俳諧ゆ師の句連歌に旅の句三句つゝさ三句ゆ無しゆ
多くゆゑに八神祇又恋無の句旅ゆてこゆゑ所ゆ
今旅無難ホ有て又一ゆ一式ホゆる旅旅の句ハ式西
会ゆ出るゆを知ゆて和歌を載へ俳の門ゆ乃ゆ沙

邪の俳諧ゆ仏ホと有ことゆ出へしとハ連の教ことあり又旅
ゆ歌の一部ゆ云ホぬ人ゆ邪道ホ是無へしゆ云ホ有
ホ歌を乱ゆ新式ゆ云ふ新古今ゆ以来の作者を用へうゆ
八代集ハ古今後撰拾遺後拾遺金葉詞花千載新古今ゆ
之後土御門依勅新勅撰続後撰二代を加へて十代集成
ホ式ゆ云ふ又坂川ゆ度の作者ゆ八十代のホの集ゆ
ゆもたゝひ集ゆ無ぬ歌ゆ作者ゆ他ホれ珍ゆ出ゆ
又新式ゆいとく人のゆまゆ出くさゆる歌ゆを八付合ゆ是を
ゆ入ゆ用ゆ出ゆ沙法ゆ八付用ゆ一しこと
ホ式ゆ法ゆ是別ゆ有ホ式ゆとゆハ古今ゆ沙法ゆ

合一句をいふ俗会とハ斯遠き或も一句余情又名所後
合うる物を付るをいふ俗会ハいづれの集にてもてきるゆく
論迦のくら新式は業といふ句にかゝると付てまゝ紅葉を付へか
らい毋まて付へしまゝといふ字かゝる所之義しいふ句に西行
付て春花を付る半西行ものとをて代ふ付く定云ふ所前
ふ逸を又たとくハ業といふ句に風とも霞とも付て又ふて付く
数句を連ねとかゝるも一座まて逸之化俗之又作とも句に
と付て又作出る時夜の字ふ付之めの此を逸迦おしと
云ふ山と付次は富士命と付ハ此那て市載へ逸るふり色城
嗅他俗之一巻の内似ふる句逸之なり是を逸迦ふ小林の

ふ小林そうに出へうふ所のいとく代の句ふり先那ふ句ふ
句ふ出ふ出ふとふ出ぬりのくふく思ひ別て味へふふ句に
陸ふ他の句ある時ふ必ひふ句を川角一執句ふ表と裏のふ
ふふ二句ふもふふへしとハ云ふふ大林のふて小林ふ那ふ
へしふる紀連那ふ出ハぬ方にちゝむ事と云ふ句て山風
や枝ふき花を送ふ人とふきこの句山風の枝ふき花を送る
て全ふ生ふる新ふ句同ふの連那と俗作へふる
ふしふを又いふく

新とハ霞とふるに生へかや
秋風ふ吹ぬく白河の関

都ゐなさしこ事業ゆえ
ちみちちく白川の岡
式部の夏師のいとくいみ〳〵しうもとりたる仕こう
まうてゝ小松のうれるこゝ云事なるこゝ也つる〳〵今師のこゝよ
所後のこゝ外月は松を出て十月ゐ及ひ白川ゐ事り記業
のちゐ生業ゐるを又て前の解因法師れ家をゝひ出し所
その家の所所を感涙ちゐと云ふう詠ゐ家ゐ所へしも
出て小松れうくれゐと云事切字の中師のいとくむしゐと
用ひ事ゐ文字も用ひ連俳の出ゐ要くあるゐ中へ切字ゐく
て小松白れ詠ゐ切字れ付句れ辨へ切字を加へくも付句れ

業ある句ゐり誠ゐ切ゐる句にあ〳〵又切字ゐくても切
字有ゐ分別切字の中一ゐその位ハ月花と志しるれ小志
ゐゐし〳〵程ゐ侍ゐ生師考ゐゐを大切ゐして示され〳〵
まゐくゐのゐゐ梅の花と云句をして切字を入ゐゐ
を業しられ侍ゐ所へて此句ハ切字ゐくて切ゐゐに侍
ゐと云ハ切ゐ入ゐたしゐた入ゐゐ切字ゐたしゐた入ゐゐ初心の
人乃道の中ゐ此ゐ義てゐ〳〵つねゐ侍〳〵むへしゐて
侍ゐゐ中も記き句ゐ句と云ひやむゐ考ゐたしゐ中む
〳〵中ゐ示されしゐ
文章の中師れゐく題名と文章ゐつゐ序ゐ由序ゐ

序内序とも二体あり由八新るゝ序を序末八先
のゝを序内八その中の中の次に出れるを云ふ此二体をひとしく
て序一つもあるゝ跋も序ゝ序あるゝ序あつく跋あるゝ序
も跋もその云ふ所ゝ跋八序を兼ねゝ云ふ物ゝ序
とゝりて書ゝ出るれ仙ゝ序跋ゝ序号自を云ふ字
七字云八者ゝの格ゝ七文ゝ形ゝ尤の詞九ゝ云ふひと
對あり附者必對を並くゝ古ゝを並附八古ゝ対歌山水
意生記ホ古のゝ對同ゝ詞ゝ中の中格和ゝあひ
漢ホ八ゝ跋もあるゝ記八ゝ物を記ゝのゝ格八序
跋ゝ同ゝ中の遠のゝ格ゝ同ゝ中れ遠のゝ贊八かゝる

のゝ即山吹ゝ句を生る附八山吹をゝ色て贊ゝ山吹を
褒義の義理ゝ物ゝ文章ゝ云附四文字ゝ云大ゝの格ゝ
句合制のゝ所義制ゝ云ゝ連中の新書詮俊批判ゝ
を云ゝ性合八所義判の格ゝ故ゝ判者も志ゝ形ゝ
といふ附ゝ者奥ゝ跋ホ跋ホ序ゝ序ゝ中ゝ句引
まても付ゝ云ゝ所に所合ゝ所ゝ産の物ゝ為ゝ制もあり
産の制八古ゝ文章を立ゝ判ゝ所ゝ雜陳あつ
判者名を書ゝ小を加ゝ判を中ゝ巻ゝ沢ゝ多く
ゝ物のゝ

懐紙のゝ八百韵ゝ式ゝ五十韵ゝ仙ゝ孔器ゝ物ゝ連孔

の古式ハ表十句各紙の裏六句唐七句去花裏表ヨリ
究表の内名示必一ヨ今も清水連哥をせめしとなり
師のいとく古法表十句の例をもて八句ハ後二句ヨ
表ヨ始ふるの歌連歌に今にせを俳ヨハくるしかれ連
哥に鬼虎鬼女さし出る歌表の内嫌俳諧小も鬼女ハ
形りくるし鬼虎ハくるしかれそのか人を数を切るもゝ
なとれれハ用捨をくし百韵一示ヨ迄くるしと師の云こ
又歌の詞述懐の歌祝言に云る句ハ表の内いく付んん
とたつる時師のいとく句にるくし又字ハくるしかれ
祝言よいひるをもくるも人のうくに云ちいよく述懐之花のさい

しの歌をくるしかれ家し堅ヨ下る夕貞ちとく金乃字
家を移を句ハ用捨をくし他人の句ハとるもくし之又意
字をも外嫌ふ古ヨ中祝を下くるして表ヨおくされ
又他句のくるしより用ひる形と句の歌いく付んと云ハ師乃
いとく大形ハ表ヨ嫌ふくしにもよるくきヨるくるいつれと
てもくるくるくし詞ヶ出るしてくの下に嫌ふヨを持るハ
他者清かるくるきる形し一向ようちもてそるる歌る
くしはくるも表の歌ヨあるされハ考ヨくるくしかれうちもせ
ミるあハあると云至又古今の人の名表ヨもををいく付
人とるヨくに師の云今世人乃名をくしもくし古人

の名ハ始よりてくるしかるべしさしもなるべしと雖
と云て懐紙に意を形くていとしのむしよりとのはし
あるなくて終ハさるべうなきいとあと云ハせるハ終て
大切のものと懐紙に歌を用るるハ神代よりとなり
まるの例と思ふくてハ捨るとこうもつてしるべしと
師のいとくたとへハ仙人ハ三十六歩三一歩もあとに残る心
なりしかるに三歩ハ仙人の及ハたく先人ハ仙人なれハ数句先
ものハ一座者の沈られハ初心の者ハ是しハ云ふ初心
ものハ法を合ふ者も言く位よりしかを是しとむしるを
云ふる先師も懐紙のかるかるをぬれしと時代ふもるべき

ものや作人又古来より新宅の舎に燈ると火花当
逆悔よりて紀乃逆ふ罪とゞ船中に残る志つ波浪風おの
おいむへきに光とそ又荘ふ具の唱一座よ芸舎ものをひめて
主へしさ白のこに所沼をしるあるへし拍子亭主のなす
事むしよりて云志られも芸尾ふもよるへし客か白
もてむしハ必客よりて挨拶并一にか白を拍も答る
こくにうけて挨拶を付ゆるく師のいとく拍亭主ハ白城
云ふ亦多挨拶之言自花のものとそるる白少てもあい
さうのかとの教くかに白に三月上後る京和出る時ハ花
もて尚季を定むへしそハ連歌のるこ俗ものに巻

人師のいくさ句に祇抵人義を分一事なる時ハ無して
根本にしたがひ詞ゑもさんも句あハあるべし但ハ祝ちの
季一座ちにして云句を根子無あるべしたる句
ハ依一一對付遠付ゑ句ハ添付留の歌むしより云変ぶく
師云分一ち句をゑ事てつりあひ考ちうち添て付る
ゑ一句中に他を物ぬ事あるべし留りハ文字ゑ言ハ至
宜ゑ一かる留メ自然よある句ハ詠あり并一意對合体
のゑとあり一一他ゑ句ハ先ち句ゑもとゑく考
ゑ免させる事ハ云ちも他ゑより今言をあるいハやう
挨拶してゑく考めて根本一ゑかされハ言ゑ孔うて

ゑ下ゑ事ゑたゑハ連句のゑ句ハ聯句ゑ唱句ゑ孤句ゑ對ゑ
此格をハて文字留ゑ詩聯句に習て韻ゑ事ゑハ師の四
大付ゑて物て考ゑるく考しとなり或ゑ留りの
事ゑ一ゑ他ゑ一宗祇より此格式ゑ考ゑ用る通りゑ
疑の切字ゑ句乃時ゑ并ゑ字にゑ考ゑと古来云り
うゑひの句ゑ句去ゑ後ハうゑひのゑ字なり句中ゑ
押一字あゑやかいつ付ゑ句ゑ事ゑ又句ゑよりて押字ゑく
てゑ考ゑるあり一字ゑ考ゑをゑんちゑんの歌ゑ分留り歌句
の并ゑ事てゑ考ゑとゑ云ゑ考ゑ分留り歌句
ゑ花のちゑ分月光分の歌ゑ盛りあてひゑりあて

といふがゝ之先師のいとくみてになる小冊メくしかれ
ども八句八句とゝ文字冊を示蒙冊月花よりの
古法に倣者多之一説古書こゝある八句の合韻字冊り也
惟帝小文字冊りなるべバざるまゝに冊之為掘を示蒙まて
冊メは井三文字冊小て冊るとも之をかくせすを進人ゝ
き考の冊をゝくとを見出乃のるゝ井三八相違る成歩
とをれとも掘の句によるゝ遠付れ和し付小の句は時
を井之まて特をるにおゝさるゝなんゝ句歩神祇
小のまて掘を見に庶者る時井三にゝり必を相し
とゝれとゝをゝ師の説ゝ四句めハむゝゝより四句めゝゝる

と云て中比くかるきをゝうゝこれ師のゝとく主きハ四句月
の体ゝ句ゝゝ掘ゝひゝゝ句中に仮をせんとゝ古ゝ説
和と嫌ふゝ之妻秋の季つきに句月ゝて花月の句を去る
多必あるゝゝゝの師説也ゝ句めゝ七句めゝ月ゝて之後ゝて
古説あゝ七句めも同ゝ仮之井三の後一帰上の句を実ゝこれ
中ゝも月の座八名ある而之老分に冊ゝ日字を表ゝ特ふ
も懐紙をたゝ掘ゝ而ゝて冊ゝゝ字冊八句ゝ一体表道
具ゝ之裏ゝ来て四妻八本と連孔ゝ古説あり四句めゝ妻を
せんハ句めゝ言ゝ人知せん花ゝつゝ句仮を表ゝ他諸も
仮之他の句を延ゝに及妻出八花を付ゝゝ

おしみ花とあるを花の字の句ゆ秋の字用給ふべし然れ
花をむつかしきかと連歌は秘して句ありつるむと
之他ゝ例法師一身の定座をこゝろみる師のふくみ十句
より内ゝハあるべうれ奥ゐ玉つくハ少の無ゆ故ゆ月の字り
宗仙ハくゝかる句一器の物ゆ之月の座ゆ字有時も美
今ゝる時ゝ実名ゆて書くゝ実名の付ゝ人ゝの花をゆあるく
しゝと師の詞之又師のふくみ身ハ上句勝たるゝ一歳月ゆ
身の白つゝしゝ秋ゝ時ゆよるゝ法ゆハあるべゝと之定月夜
ハ秋ゆて実の身ゆハあるべゝを句に出る時ハ十月ゆ
他季ゆて有時ゆゝと書くゝ身ゝいゝ字に句ゆ時ゝ秋式

ゝ師の白表ゆ月二ッ稀ゆ有ゝ時ハ身数八つゝ名の裏ハ
まれゆも自然しゝと之花のゆハ花ゆ本の内下ゆ句ハ百ゝ
定座まれゆてゆれるゆ形しゝと之賞花の句ゆ句ゆ付ゝ
又その一句のゝう実ハ梅菊牡丹形と下ゝにして仕立ゆ花
あるゝしる句その本ゝに書ゝ事を持ゝ花ゝ或ハ
四月ゆ花を見るまゝ九月に花咲ゝと云ハ師の白
九月ゆ花咲ゝゝゝ句ハ非云之形きゆゝたゝく名本成
ゝて花ゝ外云ゝも四花ゝ花ゝゝゝハ橘のゝゆゝゝ於
裏花をゝゝハ之ゆを四花ゆせゝしゝてハ花の句ゆ名く外ゝ賞
程しゝゝ宗祇の時代ゝ百韵花之本之雨一ッ之宗ゝの時

よいてう白ひの花一本兩一の勅許を蒙り文台美國せう
まて花四本油二ツ為ゝ寄り付る連歌の式と師の詞と
裏一ツの句も初のふくかうくとあるゝ句なきを追ふ
ものゝ及とゝ揚句八付さるよしと古説を今一句まで
一座無学なる故とまゝ第て素しゝ寄をかの句を無
亭主の寄る所よあれ初の一ツは執筆ハ揚句ハ
筆を主ゝかの句ある文字をつゝしむとゝ四ほの花ゝて
春季の句に寄るゝも揚句に季をとゝ形へゝたゝ
六句に及ても主ゝとゝいつまの季意ゝても揚句ハ
寄り合ゝ寄りあ

こゝ